

天保期和歌山藩下級武士女房の日記（その一）

藤 田 貞 一 郎

目 次

一 解 題

二 史 料

一 解 題

ここに紹介する史料は、表題にも明らかなごとく天保八（一八三七）年和歌山藩下級武士の女房の日記である。今の所、筆者名を明らかにすることは出来ない。後日、傍証をかためた上で、確定するつもりである。亭主の地位は、あるいは藩校の教師ではないかとも思われる節があるが、今はさしあたり下級武士とだけしておく。

原史料の体裁は、横は約十一センチ、縦は約十六センチ、表紙ともで五十八枚からなる小冊子である。表紙は三分の二ちかく破損しているが、「酉 日なみ」と判読できる。天保八年一年間の日々の生活を、女房の目でこまごまと書つづつたものである。が、記載の形式などからみて、後日、当人が若干の加筆をしたり整理し直したところもあるとみてよい。この史料は、現在、和歌山県海南市黒江の片山卓蔵氏の所蔵になる。今日まで長期間の利用を許された氏に、深甚の謝意を表したい。

今回は、この日記の元日から四月晦日までの四カ月間の記事を印刷に付す。残りも機会を見付けて活字化

し、多くの人の利用に供したいと考えている。

徳川期下級武士の生活をあらわした日記としては、たとえば、加賀樹芝朗『元禄下級武士の生活』（雄山閣・昭和四十五年）にとりあげられた名古屋藩下級武士の「鸚鵡籠中記」がある。あるいは、江戸時代の武士の生活をわかりやすく説明した書物として、進士慶幹『江戸時代の武家の生活』（至文堂・昭和三十六年）が、すでにある。そうした状況の中で、イエ研究の同人の驥尾に付して、このような史料を紹介する理由は、こうである。それは、この日記が徳川期藩社会における下級武士の女房の筆になるものであり、そのためにまた一家の家計をあつかる女の神経でもって、まさに下級武士の家の日常的な生活の諸相をこまごまと書記しているからである。この日記は、いわば、柳田国男が追求したような、一回性の歴史に対する一回性のない歴史（中井信彦『歴史学的方法の基準』一四四ページ、稿書房、昭和四十八年）、その一回性のない歴史の中心にすわっている家の生活の実態に、すこしでも近接するための

資料となると考えられるからである。それにまた、天保期という興味ある時代の日記であることも理由である。

内容についての私なりの受け取り方については、全文紹介を終えた時に記すことにして、まず史料を紹介しよう。

なお、筆写にあたっては、句読点は、いずれも、私が適当につけた。ただし、文章中、大きな○印があるのは、原文のまま写し取ったものである。これは、日記の筆者が、記事の内容を区分するために、時に付したものと推定される。また、日付に近接して○あるいは●あるいは●の印があるが、これも日記の筆者の記載になるものである。すなわちこれは、天候に興味の深かった筆者の、晴天、曇天、雨天などを表示する記号である。（一九七三年十月二十四日）

二 史 料
丁酉正月ヨリ

元日○晴。此日、高橋三郎右衛門を酒券一、筆貳本

来りぬ。

二日○同。

二日○同。酒貳升切手取用。

四日○

少々風有寒シ。糸川安兵衛（破損）藏遣来。酒出ス。

池田、貴志、松下へ赤い送る。此日岩

一郎誕生。

五日

六日

七日晴。

八日

九日

十日晴。炭壺俵取、代三百七十文、八百安。

十一日雨。鏡開キ、雑煮。

十二日 梅本平七ヨリあめ糎、数五ツ。

十三日 吉田善之介母、妻礼ニ来ル。酒出ス。

水野江参ル。夜五ツ過帰宅。少々風引。田宮

ニて菓取帰（ムシ）。

松下へ小梅礼ニ行。此夜を風引。

吉田善之介を書状来ル。

湯ノ川善八加増之由聞申。

六日雨天。経汝院岩一吉田江行。

後松魚二尾持参。

十七日曇。夕方ヨリ畑屋敷江岩一郎つれ行。此日万二

郎誕生之由ニて赤いニよばる。

十八日晴。宿ノけいこ始。岩一郎孝経よみ初。甚左衛

門、留浦亀松来ル。ミき出ス。村井も来

ル。

十九日

廿日 鈴木ノ跡目相済。岩一郎つれ行。

廿一日晴。夕方増代、お萬お直つれ大師めぐり之由ニ

而立寄ル。酒出ス。

廿二日雨。松下家内礼ニ来ル。

岩一郎江天神ノ箱トせんへい一枚、かつ越

ふし壺本糎。

夜九ツ時分迄お辰、お才遊ぶ。

廿三日 初而学校ノ当番。

廿四日 初而当番。

廿五日晴。御扶持方出ル。三俵内^{老俵}川三^{老俵}宿ノ

老俵喜八江遣ス。百六拾七匁がへ。

金老歩 鯨肉代。

三拾匁 帶受代。

申極月残り引ふ残。

梅本ヨリ讓^カれ六十谷助四郎へ行。

廿六日晴。信衛同道ニ而鈴木江礼ニ行。

廿七日 水野公江参ル。

炭老俵八百安^る。代三百廿文。

廿八日

廿九日 戸口江寄、内村同道。同所江鯨肉送ル。

晦日 内村ヨリこち^貳本貰。

□^破□^想朔日

□^破□^想日 糸川、内村来ル。

六匁 酒

老匁 こち

四分^へ厘 このしろ三

二十文 大こん

三日 二文 申

十文 とうふ

七文 かんらん

九文 あけ

十三文 とうゆう

四日晴。初而同寮会^{（カ）}。夜彦十郎来ル。四ツ時分皆

帰。後鈴木江、芳太郎江行。

五日風有。三十文 いも

十五文 す

五十文程 せんまい

六日

七日 夜千賀女来リ、留ル。

八日 勢州ヨリ石井ノ状ヲ仲津伴右衛門ヨリ持参

ル。金貳歩貳朱貰。但是ハ同寮江酒肴振舞

料。

十日 水野公ヨリ大刀からみノ料ニ袴地一反賜。初午、朝小さよ来ル。日高屋江足袋取ニ遣ス。但四足。

内二足ハ三宅定二郎江餞別。夕方ヨリ母君、岩一郎、小梅三宅ヘ行。風荒吹ゆヘ早々帰ル。

〔破想〕
晴。

水野公江御礼ニ参。

十二日晴。炭壺俵米や久兵衛イタコ。代三匁六分。小豆イタコ

島小浜兵三礼ニ来。但南一暮祝義、イタコ匁当春ノ祝義持参。

春ノ祝義持参。

十三日 少々風有。积尊初メ。四ツ時分ヨリ学校江行。

朝津田幸二郎来、吉村常楠ヲ頼来。

(注・この間空白やや半ページ程あり。一部書直しのためであろう)

丁酉正月

元日晴天。高橋三郎右衛門筆貳本。酒券一ヲ以持参。

二日同。

三日 少々曇る。切手貳枚忠兵衛ニ取ニやる。内

村又十郎来リ、酒出ス。小梅齒痛ニ而ふし居る。又十郎ニまじなひおしへもらふ。

四日 岩一郎たん生ニ而赤めしたく。松下、池田、

貴志、先長屋きく乃へ送る。

新右衛門いもわらづと持参。

糸川弥蔵昼前ニ来リ、酒并めし出ス。

五日 妙宣寺礼ニ来、酒出ス、扇子壺対持参。

西光寺礼ニ来ル。茶わん壺ツ持参。

礼ニ来、岩一郎へめんくわし持参。

六日 梅本平七来、酒出ス。

村井来酒出ス。

七日 ○池田ヨリ風呂申来リ、家内いりニ行。

八日 ○

九日 ○村井、池田兩人江酒出ス。

忠兵衛ニ酒壺升取ニやる。

十日 ○炭壺俵八百安ニ而取。代三百七十文。

小梅齒痛快氣ニ付夜金ひらへ參詣。もとり

ニまじなひの黒豆川へ流ス。

十一日 ●鏡開キ、朝忠兵衛来、雜に出ス。

十二日 ○坂本や参り、ゑほん五冊とる。

老冊鈴木の小共へ、岩一郎持行やる。

十三日 ○梅本平七よりあめ貰。

吉田善之介母、妻礼ニ来ル。

水野江豹蔵参ル。風氣ニ付田宮江立寄、菓

五服取来ル。

小浜兵三礼ニ来。南一去年ノ祝義。

銀貳匁春ノ祝義持参。早束^(はやづむ)帰ル。

夜五ツ前。

十四日

十五日 ○小梅松下へ礼ニ行。せんべい、かんさし持

行。此夜ヨリ風引。

吉田善之介ヨリノ書状老母持参。

藤四郎来り十六日ニ参る悪き由言。

十六日 ●雨天ニ付藤四郎方へもふ参。

湯川善八東都ニ而加増之由聞。

経汝院岩一郎つれ吉田へ行。但う越二尾持

参。

十七日曇ル。夕方ヨリ岩一郎つれ豹蔵^(豹蔵)□^(破損)舖へ行く。

万二郎たん生ノ由ニ而小豆いいよハれ帰

ル。

挾けい子初め。

十八日晴。宿ノけいこ初。岩一郎孝経よみ初。村井

来、ミき出ス。早々帰ル。

池田甚左衛門、同留浦亀松江酒出。

夜分芳太郎来。酒出ス。同人のみ明。

十九日 夜分幸二郎来り、鈴木芳太郎ノ召状致来ノ

由つぐる。豹蔵風氣ニ而ふし居る。

廿日 ○風有寒し。夕方ヨリ豹蔵岩一郎つれ鈴木氏

へ悦ニ行。

酒五升藤四郎世話ニ而取。右を兩人にて鈴木

木氏へ送る。宿ノ老升。

中ノ庄林^(ちやう)街道次男同苗敬二郎来。金老朱持

参豹藏風氣ニ而ふ逢。台所ヨリ帰ス。

廿一日 ○増代、お萬、お直三人ト万二郎いたき大師めぐりノ由ニ而立寄。酒出ス。

廿二日 ○夜松下家内礼ニ来ル。岩一郎へ天神ノ箱、かつをふし壺本、せんへい一枚、持参。酒出ス。仙右衛門方ニ而すし取。但二匁。夜九ツ時迄遊ぶ。雨降来ル。

廿三日 ●当番。

廿四日 ○当番。

浅之介明日直川参ノ事言来ル。

廿五日 ○小梅直川参リ、助四郎宅へ立寄。畑屋敷梅本家内ふ残同道。

夜五ツ時過猪三郎ニ送りもらひ帰ル。

御扶持方三俵出。内壺歩鯨肉貳匁五百匁代。

三拾匁 小梅帯受。

残り 去年ノ残遣スふ残。

廿六日 ○鈴木龍源寺弟子ふ若銀貳匁五分持来。

八ツ比信衛礼ニ来ル。是ヨリ鈴木氏江参ル由聞。小梅岩一郎同道ス。

但竹馬ト半切百枚持行。

黒豆壺袋、からし廿斗、信衛ニ貰。

鈴木ニ而遊び日暮ニ相成。本一丁目迄のふ江を送る。小さよ筆つきニ来。鯨肉半分長坂愛之介へわける。

廿七日 水野公江参ル。

炭壺儀取。三百二十文、八百安。

廿八日 ○内村氏へ鯨肉持参。夫ヨリ戸口江参リ候由聞。

廿九日 内村ヨリ朝こち貳本、けらいニもたせこし。

晦日 壺月ノ内清(ツキ)天廿四日。

二月

朔日 ○夜、戸口、糸川、内村来ル。

二日曇ル。小さよ来ル。帯受さす。

三日 水野公ヨリ使来。有馬君ノ詩ト看一籠持参。

四日 ○会初ニ而八ツ時比ヨリ、伊藤、岩橋、志賀

来ル。夕方ヨリ中ノ丁山本も御出也。喜多

村集へ来リ。鈴木芳太郎組入之由つげ来

ル。皆之帰後、豹藏右ノ由鈴木へつげニ

行。

五日風有。長七やとふ。はたけ仕事。二百文遣ス。

七ツ比ふ雨降。長七ニ傘か須。鈴木へてう

ちんかへす。

六日

七日 ●三宅江要用ニ付豹藏参る。糸川参リ居由。

夜夏目へ会ノ筈ニ而参候所田宮も断来ル由

ニ而会やむ。

八日 ○夏目よりなしの木貫ニ来ル。夜千賀女来

リ、とまる。月夜也。

九日 ○寒し。千賀屋後帰ル。

水野君ヨリ使来。たちからみの代リニ袴地

一ツ頂戴。

勢州石井満之介も状来ル。但金子貳歩貳

朱。是ハ同寮中へ酒看参らせ度由也。詩を

こふ。仲津伴右衛門福町森加ニ来リ居、夫

も届ケ也。

豹藏、山本彦十郎殿へ参。留主中也。

十日雨。初午ニ而観音へ参りいく約束致置ニ付、小

さよ朝ヨリ来ル。しかし雨天ニ而延引。夕

方母岩一郎三人同道ニ而三宅へ礼。又御悦

ニ行。足袋貳足定次郎殿（ついで）銭別大せんべい壱

枚ハ持参。

日高屋ニ而たひ四足。内壱足ハこん。大風

雨也。

十一日 ○水野公へ御礼ニ行。

十二日 炭壱俵取三匁六分。米ヤ久兵衛。

十三日 少々風有。釈尊初メニ而学校江朝四ツ比

出。

幸二郎来リ、吉村常楠トやらんヲ頼ニ参

ル。

夜畑屋敷へ行。肴致来ノ由夫ヲ貰約束。

十四日○朝お直夜前ノ肴持来ル。但二百五十文位ノ

約束。村井婚義之由ニ付悦ニ遣ス。長屋藤

野ヲ遣ス。但畑屋敷よりの肴ハ大ぼら老本

ゆへ、萬町へかいニ行。せいごといへる希

極小キヲ八ツニ而老奴五歩ノよし也。至而

肴払底也。

十五日雨天。三宅定次郎村井へ引越。昼後豹藏上下ニ

而両家へ悦ニ参ル。九ツ比ぶ雨上ル。又夜

分村井へ行九ツ前帰宅。

十六日朝曇リ昼後晴ル。

学校江行昼過帰宅ス。経汝院岩一郎つれ夕

方ぶ日高や行。夜分小由来リ、江戸前原よ

りの紙包届ケ候事。但浅草のり貳状也○疊

紙六ツ相渡ス。

十七日朝雨降、昼时分より上リ。昼时分村井定二郎殿

札ニ来ル。多右衛門殿も参ル。八ツ過上辻

てい助来ル。酒出ス。梅谷へ書画会ニ而行

由ニ而七ツ過帰ル○同人江熊野之御詩屏風

ニ張有之を遣ス○かせ田ヤニ^{ハシ}珍ニて

借。中村司馬方へ行。留主ゆへ三宅へ寄、

四ツ時ニ帰。

十八日快晴。午後ヨリ小梅佛参。遠藤江寄。暮過帰ル

○鈴木氏ヨリ塩俵もたセコす。代ふ知○先

長屋おはあね藤江札ニ参ル。釈尊之弁当ノ

菜上田ヤ江ふさよ取ニやる。但老奴五歩分

○中嶋ヤ江足袋老ツ取ニやるふさよ。

十九日晴。釈尊ニ付学校江五ツ前出勤ス。

八ツ頃帰宅。夫より同寮皆く立寄鳴瀧江

遊ぶ。暮頃帰ル。皆へめし、酒、そは出

ス。四ツ頃帰らる。

廿日快晴。新道金見ヤ五兵衛妻来ル。大坂大火乱ばう

の由語る。三井ここの池など焼たる由、藤

四郎も来りはなす。

大塩平八ノあれ。

廿一日雨天。大坂騒動ノ由噂まぢく也。町与力大塩

平八とやらん云人のわざ成由上へも書上也

○昼時分御通シ来文言ノ内荒増ハ先ニ大坂

表出火ニ付さわがしく候ニ付品ニ寄人数も

さし向らるる事も可有之候間各々相心得差

支等無之様用意可致との事也○今ニ火もへ

ゐるよし也○八ツ時頃鈴木隠居児つれて

寄。酒出ス。黒田勝二郎の娘初而のひるな

ゆへ祝義遣し来る帰りがけのよしはなす。

少々雨天ゆへ道わるし。

廿二日晴寒し。今日長屋両方共入込也。朝塩路秀庵来

ル。菓子料として金一朱持參早々帰ル。昼

後永井円左衛門肴一籠致来ス○夕方勢戸物

ヤ来、茶碗三ツト又一ツ買惣百十五文也。

○夜金一朱かへ此代四百九文也。百十二文

油壺徳り買。

廿三日晴。勢州石井ヨリ酒肴料越ニ付同寮集会ス。但

林助九郎下屋敷江相集筈之処大坂ノ騒動ニ

付八ツ頃ヨリ大田村岩橋ノ宅へ行。重組ニ

重但壺重ハ取口一重ハ造り肴。右ニ而南鏡

一ツ仙右衛門江、酒壺樽南鏡一ツ藤四郎取

次。

廿四日雨天。学校当番午後志賀江行。夜四ツ時分帰

宅。

廿五日晴風有寒し。吉村常楠入門。御扶持方出内壺俵

川三へ入。八斗五升銀札拾六枚ト錢七拾一

文受取。但米四斗九升石百拾七匁がへ○大

坂此度騒動ニ付米百匁ニ相成よし○大塩平

八ト同志之者四人ト三ツ井こうの池へ十八

日ノ朝至りて云ルハ、つらくうん氣を

かんかへ候へ者火氣高ふり候間随分用心い

たさるへしと云、町々へも出火有はやく

用意すへしとふれ廻り、十九日かうの池へ

大ツ、ヲはなし夫方三ツ井江至り門ニ而し

はらく休足し多はこなと呑。夫より車ニの

せて来りし大ツツ打かけたれハたちまち

やけ出したり。俄の事故近所のこんざつた

とへんニ相なかるへし。男女老若なきさけ

ぶ声おひただしく強し。いにしへの軍のた
たかひニことならざるよし也。ざんじニ死
人山ヲなし足達者なる者ともハ塚迄にけの
ひおし合へし合す。二十一日の朝やうく
ニ火ハしづまりぬるよし也。十九日ニ出た

るよしニ而かの大塩の人相かき廻る。あら
まし聞たるに大塩ハくわがた打たるかぶと
ヲ着し年齢四十二歳斗。其余ハ同心也。は
たにハ天照大神八幡大ぼさつ諸人すくい
の爲と書しるし有。黒糸おとしのよろいヲ着、
黒らしやの陣羽織ヲ着し、下ニハ何ヲ着た
るか不知。此者見付次第召取筈。もし手ニ
合ふ申候ハハ切すてニ致し候共くるしから
す、との御ふれ也。大塩ト町与力同心三人
都合（つひ）六人也。二月廿一日ニ出たる由也。

二六日

●吉村氏ヲ肴一籠送らる。午後鈴木芳太郎
来、酒出ス。村井多右衛門ヨリ肴送らる。

ぼら一、さるぼら十。

廿七日半天。午前梅本浅之助来。千太郎大病之由つげ
来ル。昼過ハ豹蔵行。七ツ頃夏日藤四郎
来、又永井円左衛門来、酒出ス。夜永井へ
天神ノ糸一枚まいらする。疊紙ニツ藤四郎
へしんぜる。

廿八日快晴。長七来ル。不浄ノ屋根直ス。長屋ノ嘉兵
衛手伝ヒ請人疊ヤ来ル。昼過遠藤蔵助東都
へ行ニ付いとま乞ニ来ル。酒出ス。小佐よ
来リ、火事羽織取寄。銀札三十六枚相渡
ス。

廿九日雨天。午後天氣能成。長七来リはたけ午房まき
夕方帰。三百文遣。一コ半こじき二郎吉湯
川氏ニ而足洗ひしたる由ニ礼ニくる。こう
じ五ツ持参也。岩一郎とお里ヲつれ三天江
参ル。此日少々寒し。

三月朔日少し曇ル。昼後晴ル少々寒し。夕方夏目藤四
郎さそひニ来リ、手せいノ袖べいし持参。

夫と同道ニ而丸ノ内田宮氏へ会ニ行。四ツ頃帰宅○長屋ヨリ大センべいニ枚貰ふ。

二日 ○少々寒し。白桃ノ花吉藤へ遣シ又桃ノ花貰

ふ。但し赤。岩一郎少々風氣、小梅少々齒痛○礼恭院様祥月非人共へほとこし。

三日朝少々雨降午後晴ル。八ツ頃ヨリ松下へ行。豹

蔵水野公江上堂。夜四ツ時分帰宅也。

四日晴寒し。夕方おとみ子をつれて来ル。此夜留

り。炭一俵、又兵衛ニ而取代三匁余。

五日 ●雨降。早朝おとみ帰らず。○村井氏江行○

水野公ト紀三井寺へ行善之処雨天ニ付御断也。

六日 ●少々雨降共参る。悪き由昨日内村ヨリ手紙

来ルニ付四ツ頃ヨリ行。段々天気も上り七

ツ頃ヨリ八日当り。八ツ頃ヨリ岡本おとみ

来ル夕方帰らず。六ツ頃吉田善之介母御東

都ノ状持参。内ニ役箱武太夫ヨリノ状并ニ

扇子貳本有。江戸ハ米あたひ一円金ニ二斗

四升ノ由申来ル。当所ハ石百匁也

七日 ○おとみノ事ニ付母君十倉へ行。山本藤右衛

門江立寄。同人義八十二相成。五十年相勤

候ニ付御ほめ五石むすび三人扶持其まゝ

也。一昨日相成よしニ而酒肴出ス○松下ハ

忠二郎ノ組頭久野木へ懸合○御目付衆廻状

来ル。此度大坂乱妨ニ付大塩ノ同類ノ内今

又二人也。

大坂御定番

遠藤但馬守組与力

大井伝次兵衛義絶ノ悴岩二郎事

同苗正一郎 二十五歳

大坂町同心

河合善太夫悴ニ而先達而出奔致候

河合郷右衛門 年四十斗

右之者見付次第召取候様との事

かつちうつまひらかにしるし有共はぶく。

八日○晴天。森屋庄助大坂へ奉公ニ行由ニ而金壹歩

無心ニ来ル。夫ノ母君右調立ノ為小きよ方

ヘ行昼時分帰。庄助ヘ昼飯出ス。のそミノ

通金百疋江のし付て遣ス。夕方小きよ来り

娘やすの遠方ヘ遣ス由ニ而なく。さいふの

切ト塩かつを巻本遣ス。○東都前原ヘ状出

ス并加田わかめ十枚遣ス。

右ノ代百文成。松下ヘ遣ス筈。

九日○晴天。岩一郎脇さしうしなふ。有馬ニ画師来

居る由ニ而行て見る。長屋世話人岩右衛門

ト云者来り二十四文やる。水野公ヨリ本婦

シ筆十本たまふ。但くわん海異聞也。

十日曇ル。中之間当番ニ而四ツ時分方出勤又帰トモ紀

学校江行○今日も同有馬ヘ画見ニ行○留江

大弥太^カヲ狸團子^ウ火枝^カ貫返礼ニ筆巻対遣ス。

十一日曇ル夕方ヨリ晴。八ツ頃ヨリ主人内村ヘ行。小

左代来ル○坂^カ本^カヤ骨葉集持来ル。

十二日○快晴山本おきぬ来ル酒出ス ○おとみ子をつ

れて来ル早速帰らす。

十三日○快晴少々寒し。酒巻徳り取ル。母君午後岩一

郎つれて本居江行。伊勢ヘ送る寄ミセがて

ら也。夜梅本藤四郎来ル酒出ス○主人三宅

ヘ行。四ツ^{不明}□□日暮ニ帰宅ス○ませごはん

少々ミヤげ也。藤四郎^カヲ金受取。

十四日 ●天。宿ノ会日ニ而岩橋志賀伊藤三人来ル。

二更ノ頃帰らる○お直来ル。

十五日 ●八ツ時頃ヨリ主人水主君ヘ堂上ス。伊藤岩

橋志賀ノ三人同道也。夜四ツ頃帰ル。

十六日 ●徳左衛門来り川三ヘ遣ニやる。但シ米巻斗

六升取ニ遣候処天氣あ敷故米無之候間先巻

斗差上候との趣也。一曰徳右衛門^カニつか

す。同人江百文遣ス。ヤぐら直し代五十文

米つき合而也。

十七日 ○お直嶋もめん切持来ル。直段ふ知。学校当

番昼時ヨリ行。岩一郎いばらなんばんノ実

持帰ル。大ニしかる○貴志ヘ張箱二ツ渡ス

○学校話ヨリ内村ノ宅ヘ行暮頃帰宅。

十八日 ○寒し。今日ハ岩橋ノ代リニ学校ヘ行相動ル。

京川ヘ行筈。○忠兵衛しゆうじ貳本持参。

大塩平八が書置たる書ニ一と米と合て後ニ

わけて見よと書有しよし語る人有。合たれ

ハ来ル也平八と也。米ニ物ハ平八といふ也

といへし□熊野ニ而二人同志之者召とられ

候由噂有。

○三月十五日ノ比 上ぐうらヤニ住居ル者

共へ老實文ツツ被下置ル又早春ガ御馬部屋

ニ而かゆノほどこし有是ハ長屋ニ居る者へ

也。去年冬ヨリ北町ニ而うら屋ニ住難洩成

者共へかゆ被下ル。是うへハ此度者錢四百

文ツツだまふ由也。凡老万而幾らと成。乞食

日ニ八九人ツツうへ死ヌ。非人がリ有て他

所ノ者ハ皆おひはらふ由なれとも非人なら

ざる者共袖乞おひただし九目も当らぬぬ次

第也。此節米ハ壹升ニ付錢二百十四文ノ由
二聞。

上ニも三度ツツかゆ召上らるる由也。

十九日 ●曇リ屋後ヨリ雨降ル。長七小さよ来ル。夜

主人畑屋敷江行。村井来ル。早速帰ル。

廿日 ●ル少々風有。岩橋来ル。又糸川も来早束帰ル。

廿一日 ●母君坂本屋江塵紙取ニ行。田宮ガ遣来ル。

庭ノばいもノ花もらひニ来ル。しかし

咲仕廻候ニ付しヤグノ花贈ル○天神ノ像送

ル。

廿二日 ●午後上る快晴ハツ過信衛来ル。主人夕方ヨ

リ田宮江行。会日也○夜七ツ比とおほしく

廻状来ル。文姫君様十六日御逝去ニ付 大

納言様御実方御妹ニ付半減御暇被為受候ニ

付 右御伺として廿三日四ツ時ニ御目見以

上惣登城也。段砂半袴着。

廿三日 ○母君寺参。夫ヨリ十倉江立寄り岡本ノ噂

聞。夕暮過帰ル○糸川へ主人行○小さよ張

箱持来ル。長屋石野母病氣ニ付宅へ帰ル由
申。

廿四日 ●曇リ七ツ頃を降出ス○風呂呂たく。午後母君

長屋ノ小供お運ニてつれ畑屋敷へ行ともし
油耆升持帰ル。代ハ四匁九分トか八分トか
也○志賀ノ会ニ付八ツ過頃を主人行。夜九
ツ前帰宅○長屋嘉平ニ申付石野ヲ世話ヤキ
し岩右衛門よひニやる也○米百八拾四匁ニ
相成よし噂聞。

廿五日 ●夕方ヨリ三宅へ行。酔外たる故主人ニふ合

帰ル。夫を村井へ行。酒出ス。母君七ツ前
ヨリ薬師丁遠藤へ行。日高ヤへ行。裏付足
袋取。直段ふ知。但うら付ハ四匁二分也。
大ニ雨降。

廿六日 ○合巻石貳斗也。御扶持方出ル。耆俵川三

へ。宿へ二俵出ル○今日ヨリ長屋勇次お久
石野ノ跡へ入ル筈。嘉平請人先七月迄借シ
遣ス。岩一郎ノ脇ざし取来ル。金耆歩ノよ
し也。夕方白井ヨリ侍持来ル○三宅若旦那
来ル。廿九日ニ可参由云。畑屋敷ニ而白リ

んす襟二かけト浅キ緋貳尺五寸取。

廿七日 ○少々曇ル。米ヤ喜八江米耆俵八拾四匁

石貳百拾二匁がへ。耆両耆歩貳朱ト錢五十
一文受取。大豆ハ貳百目ノ由也。小豆貳百
五拾目也。夜ル雨降出ス。

廿八日

●小佐よに梅小袖取ニやる。代二步遣ス。ば
くる町お久来リ無心云。先有合ノ錢百文遣
ス。

廿九日

●七ツ過を快晴ニ相成。七ツ前岩橋来リ酒出
ス。又伊藤来ル。麦飯出ス。だいだい三ツ
取もてなし。

耆匁五分取口仙右衛門ニ而

右もてなし。

酒五合 泉やニ而

○廿五日ニ大塩平八死ス。何とかいへる
丁人(つと)と道具ヤとか石切ヤとかニかくまひ置
しゆへ役人向し処ゑんしよヲはなし自ら焼
死トも云又ハ鉄炮ニ而打ころせしとも云噂
まちまち也。いづれ死したる由也。かの丁

人もともに死したる由也。

○廿七日朝畑屋敷取次ニ而直川ヤニ而白輪（マ）子襟二掛浅キ縮（マ）袴尺五寸ト取お直持来ル。

○廿五日夕方日高ヤニ而裏付袴足たび袴足取。うら付代四匁二分たひの直不知○雨ノ降ノに母君遠藤信衛かたへ断ニ行夜帰ル。

○廿七日三匁六分ニ而ひちりめん三ツ割三尺かふ。右かねハ張箱ノはり書代として保田（マ）賞。但三匁三分こし候也。夫江三分主人（マ）足シ。小梅ノ袖口ノうら也。

晦日●曇リ午後快晴。昼後ヨリヤくし丁信衛宅へ行。夫ヨリ加指江至る。庭すきヤ色々見物し酒肴出ル。夫ヨリ又信衛宅へ行。小さめ降。遠藤ニ而茶つけ出ル。暮方宿へ帰ル。加縮ニ而紙ニ東多はこ入一べに猪口ニツ扇子三貫ふ。又贈り物大こち貳本ト伊勢ゑび三ツ右ノ代六匁八分也。魚ヤ九右衛門ニ而取。又美波よりもらひし菓子贈ル。信衛かたへいかなご一袋遣ス○此朝

お久来り小貳朱ヤル。但シ半分ハ松下分。快晴袴月ノ内十二日也。

四月朔日○快晴。今日主人同寮ト和歌へ行。但午後ヨリ○庄助来り大坂奉公も思ハ敷は無之故願も有四国へ参るニ依而道中宛くれト云ヒより二百文遣ス。しかる處舟ニ而食ニ致度故米袴升かせト言。しらけたる米無之故黒米袴升遣ス。茶つけ振廻○小さよ来ル。加納へ行ニ付小袖鳥度取よセ候。貳拾八匁也。此リ袴匁六分○拾受ル十五匁也。リ六分初金貳歩遣シ置候処さし引三朱残○百文こり木買。

二日○川原村善智（マ）俗来ル。金百疋トまんぢう十持来ル。銭や同道酒出さんト泉やニ而袴升取。仙右衛門ニ而袴匁五分取口取。しかし早速帰ル。

○長屋ヨリ無心ニ来ル。

○母君岩ヲつれて信衛方へ行。暮前ニ帰ル。

○嘉兵衛ニ金貳朱かす。

三日●お直午前来りあぶら代取ニくる。貳升ニ

少シ足らず九匁五分ノ由也。

○主人午後申ノ丁山本江かきつばた花見。

○ぼく半町おこよト云者岡本お留ノ事ニ付咄シ

ニ来ル。酒出ス○錢喜善智ノ断ニ来ル。

四日●昼時分ヨリ上ル。しかし快晴ニあらず。昼過

松下氏来リ、お留か事ニ付組がしら松下へ来リ

いわく留宅世話いたし候様ニと申来由、松下申

来ル。酒出ス○新右衛門柴一籠持參○夜菓子少

々持畑屋敷へ主人行。庄助帰り居由聞。

五日○少々曇リ。午後善藏ノ娘おミな来リ無心言。

米少々ヤル。ぬかミその素少々ヤル。

○八ツ過岩一郎ヲつれ主人川原へ行。鈴木へふ

くさかへしニ立寄る。

○お咲ノ娘おいさ来リ頼母子ノかけせん取ニ来

ル。但シ三月分として三百三十二文遣シ此後ハ

遣スニふ及。天保六年二月ヨリかけ初て都合廿

七ヶ月かけ候也。是ニ而皆濟之筈。お咲中風ゆ

へ右おいさ名代ニ来ル也。

誠ニ此節一統セ間一さく也。かるき者ハ病或ハ

こじき又ハ四国へ出る見聞も哀至極之事共也○

善知ノ夜具錢やヨリ取ニ来ル。

六日○快晴也。岩一郎少々風氣。昼時分小坂楠右衛

門おなをおくり来ル○午後十方院丁ノ女ちりめ

ん拾ぬふてくれと言て来ル。則受取。晚方田宮

儀右衛門来ル。暮方錢やヨリさげ重ト酒壺徳リ

をもたせこし、跡ヲ善知ト喜十郎来ル。則もた

らせを開キ、長坂愛之介ヲよひニやる。来リ四

ツ前迄はなす。茶つけ出ス。錢やへ姿絵一まい

やる。

七日○朝藤四郎来ル。今日誕生日ゆへ主人ヲよびニ

来ル。半十郎方ニ而指糸五分ノ取○午後學校当

番。晚方ヨリ畑屋敷江行○昼長坂へ行○遠藤蔵

主来ル。加納よりの返知持来ル。

八日○今日學校弁書御挾ミ也。早朝出ル。母君寺參。

錢ヤヨリ使来ル。善知僧今朝帰りしヨシ也。塵

紙持来リ○遠藤蔵主(この部分係)加納よりの返知持来ル。岩

一郎つれ吉田ノ母をとひ帰りニ魚ヤ九右衛門ニ而小着一ツ取来ル。此朝貴志亀松ヲ田辺ヤ江弁当ノさヤ取ニいてもらふ。代二匁五分ノ由也。

○有馬氏同道ニ而内村へ行。肴取。代不知。

九日○小梅風引少々快なり。十方院丁ヨリの袷仕立遣ス。ぬいちん老朱持参ル。内百八十六文返シ遣ス。主人岩一郎つれ都いもたね求ニ行。一ツ六文ツツノヲ二十合代百十文也。ていらんノ手ニする桃もかふ。此代百十五文也。又古き荒物うる処ニ而見当りし由ニ而、鉢三ツ猪口五ツニ而小式朱ト二百文也。木地ノ盆老ツ老匁三分トか、皆合式朱也。米も百匁代ニ相成よし。但小買ハ同様ふ下。

十日○夜母君お鹿をつれ車持たせて畑屋鋪へ行幸。

十一日○夜分お鹿ヲつれ畑屋敷江見舞ニ行代ニナミ遣ス。早速帰ル。肴二尾もらひ帰ル。酒老徳り泉ヤニ而取○小さよニ拾受さす。代老歩トかに百五十七文。本十六匁五分也。

十二日○お城当番四ツ比出ル○兵藏来ル。から曰直シ、代二百文遣ス○八ツ過ヨリ糸川ト内村ト来ル。酒老升取出ス。跡ニ有馬武右衛門来ル。又つれ立有馬へ行。

十三日○主人和歌浦へ舟行。村井よりさそわれて也。

小梅岩トお鹿ヲつれ直川江参ル。昼前ヨリ七ツ比迄かかる。七ツ比ヨリ少々風出て曇ル○遠藤江長屋ノお里ヲヤル。畳紙四ツもたせ遣ス。下地ノ二ツもとる。少々岩一郎ねつ有之ニ付、田宮江お鹿ヲ菓取ニヤル。五服貫。

十四日○主人午後ヨリ同寮会ニ行○直川ヤ周助よりどん子切持来ル。代六匁余○紫ちりめん三ツ割二尺ト浅三尺。但シ七分五厘切、都合三品取○内村より書見来ル○夜お目付衆ノ廻状来ル。其文言ハ此度大坂ニ而大塩平八初同志之者自めつ致し、大井某ト庄司トハ召とられ候事ヲ御ふれ也。白井が来、中野へ廻。

十五日○早朝少シ雨降たる由。しかし石なとぬる程

ニも不有。しらざる位也。朝ヨリ午前迄少々曇ル。今日内村が申来リ、水太夫江参上○松下氏来ル。長尾ノあられかふ。水太夫君ノ土産ニ而一酒遣ス。

十六日●夜林本ニ而銀三匁廻礼来ル。主人也。長屋ヨ

リほたる貰。

十七日○御祭礼至而天氣能、七ツ比、母君若ト春代ヲつれ、うし町へいたりお舟もとリ見物也。

十八日○今日同寮一酒一肴ヲ名々携へて、たか野はし

辺へ舟行。大田村岩橋へ立寄○かせ田ヤへ行来

リ本ノ事相談。隼人来リのほリノゑヲ頼まれる。

十九日○今日石井へ書状出ス。藤四郎召状致来ノ由、

夕方ヨリ岩ヲつれて行○風呂たく。

廿日○少々曇ル。川口ヤ三郎左衛門ニ而先月ノ残り

米六升取来ル。夕方岩一郎ヲつれ畑屋敷へ行。

出火。但遠うづノ方ノ由。今日藤四郎方壱石加

増。

廿一日○畑屋敷へ着送る。黒鯛二枚。直段四匁二分。

廿二日○学校当番。夜ハ田宮ノ会へ行。うらの畑南ばらうへる。夕方お元来リ、柏ノ葉くれと言○牧村隠居そう送。

廿三日○此三四日甚寒く夜ハこたつもほしき位也。此

夜裏橋直川やニ而醬油一樽取。代拾壱匁五分。

廿四日●裏橋直川や長兵衛母三回忌ニ付、らうそく十

三丁送らる。此方も早東使へ焼香一封もたせ

やる。明日速夜相勤候間参くれ候様書付添○今

日同寮會談ニ付、酒壱升取、泉や也。魚仙ニ而

さバ貳本、但直段八分。夕方又酒五合取。かせ

田やヨリ塵紙持参。七ツ前より、伊藤、山本、

志賀、岩橋来リ、夜五ツ過頃帰らる。

廿五日○朝日曇リ午後快晴。御扶持方納三升二合来ル。

川三江ハ例ノ通老俵出ル。右ゆへ曰ニたらず、

喜八方ニ而老升取、代百九拾八匁也。貳百匁ニ

貳匁ぬけ也。午後主人学校江行。さいてう方

へ画頼ミニ行。岩橋日前宮中ノ嶋辺行。七ツ比

帰ル。松下が赤いもらふ、あら壱ツ附○喜

多村がかしはもらひニ来ル。使江紙職ことつげ
る、但しゆうき書。

廿六日●終日降くらし何事もなし。有馬がかしわ餅少
々貰ふ。小さよ来り勿々帰ル。

廿七日○少々曇ル。鈴木隠居児ヲつれて祝ひ持参。川
三が米売升持セ越、右ヲ借用。

廿八日○留永へ女金丹売家名ヲ聞に、お留やる。右相
分り村井へ伝ニ主人行。早々帰ル。畑屋敷江羽
織返しニ行、留也。

廿九日○早朝ヨリお留留永へ手伝ニ行。おいさニ用有
てよひニ行。午過同人来り、質物之事頼ム、四
拾九匁借入也。品物二ツ、但紋付小袖、つむぎ
小袖也。さいてうが柳隠ニ舟ヲつなぐノツ浅之
介へ言づける。松下氏借増ノ加判する、但百匁
也。有馬も同様。学校当番也。お直かしは貰ニ
来ル。長屋勇次のぼり立ニ来ル。朧月ノ内快晴
二十四日也。

（未 完）